女子青年の性差意識の発達に関する調査研究

藤　田　主　一

I　調査の目的と方法

心理学では，人間の意識や行動に関する事象を問題にする場合，それが量的・質的にどの発達段階に生起し構造化される現象なのかに関心を持つことが多い。青年期は，この発達段階において思春期に引き続き壮年期に至るまでの時期にあたり，児童期を脱して種々の特徴的な変化を示す頃である。

男女間の性差は，生物学的な性差と心理学的な性差に区別される。前者は生理的・身体的に顕著で生得的であるのに対し，後者は心理的・行動的に認められる差異で，生後のさまざまな環境や経験によって形成されるので習得的である。そこには，個人が生活していく社会や，その時々の文化形態さらに時代的背景が大きな意味を持つために，個人は広く社会全体の期待に沿う形で性に基づく役割を形成していくのである。性差意識あるいは性役割観といわれる心理学上の概念は，発達段階に特徴的に現われるとともに，個人を取り巻く多種の社会環境の影響から獲得され固定化されていくと考えられている。性差に関わる問題は，個人の発達過程を考察するだけでなく，その時代や社会における価値観や教育観の基準も忘れてはならないのである。

たとえば，1904年（明治37年）に発刊された大村仁太郎編の教育寓話「我子の悪徳」の中に，東京のある高等女学校の倫理教室で，生徒に対して先生が「女子」の役割を次のように述べている。

「皆さんは心を美しくするという考えが肝腎です。身分不相応に外観の美を装ふが如きは，無論罪悪の一として避けなければなりません。女子はとかくに装飾に心を用いるものであるから，皆さんは努めてその辺の事に注意しなければいけません。たとえ美しき衣裳に外観を飾るとも，心が美しくなければ何にも役に立ちません。いかに青紫紅白に美観を極めても，造花は何処までも造花です。香もありません。薫もありません。随って美の真髄を極むる事が出来ません。野に咲く百合の花は，たとえ茨の中に咲いていても天地の美を極めております。皆さんが女子として他日人に重んぜらるゝ所以は，皆さんの指頭に金剛石が輝いている為めではありません。只心の美

しい為めなのです。即ち節操，愛情，慈悲，柔和などの徳性を具備ている為めなのです。――中略――能く女子の守るべき道を修め，美服を纏い外観を修飾する事などに心を傾けない様になさるのが必要です。斯くすれば世間の人も皆さんを尊び敬ふようになります。皆さんが是非とも左様心掛けられん事を私は希望致すのであります。」

このような例を見ても，そこに単なる美徳や躾以上のものが読み取れるのである。

発達の加速現象が進んでいる今日，思春期から青年期にある男女の身体的成熟は急速に早まっている。それに伴ない，同性や異性に対する捉え方も推移していると思われる。本研究は，こうした問題意識のもとに，女子青年の中から女子中学生を対象に取り上げ，彼女達の性差意識の特徴や発達的な方向を明らかにする目的で以下の調査を行なった。

調査対象者は東京都内に通学する女子中学生で，最終的な対象者数は1年生から3年生までの各学年230名ずつの合計690名である。

調査のための質問項目は，性差および性役割の方向の中から，ここでの目的に沿った概ね4種類の計9項目である。以下にその質問の概略を掲げる。

(1)あなたは「女子」に生まれてよかったと思うか。

(2)あなたは今度生まれ変わるとしたらどちらの性になりたいと思うか。

(3)あなたはどんな時に「自分は女子だ」と思うか。

(4)あなたは「女子だから」といって親から特別にさせられたことがあるか。

(5)あなたは「女子だから」といって親からさせてもらえなかったことがあるか。

(6)あなたは「女子だから」といって得をしていることがあるか。

(7)あなたは「女子だから」といって損をしていることがあるか。

(8)あなたは「男子はいいな」と思うことがあるか。

(9)あなたは「男子でなくてよかった」と思うことがあるか。

上記9項目に最少限のフェイスシートを加えた質問票を作成した。調査はクラス単位で実施し，また実施にはクラス担当の教師があたった。調査用紙が回収された後，未記入等を取り除いたものの中から，無作為に各学年それぞれ230名分が抽出され以後の分析対象に当てられた。

Ⅱ　女性性受容の方向

女子中学生は，自己の性をどのように受けとめているのだろうか。**図1**は，その回答結果を選択肢および学年別にまとめたものである。自己に与えられた女性性を「よかった」と積極的に受容している者は，1年生37.4%，2年生33.9%，3年生40.9%で，なかでも受容率が2年生に低く3年生に高いが，その比率は学年間に有意でない。従って，学年に伴なって性受容観が発達するとは言えないが，女子中学生の3割～4割が平均して自己の性を受け入れているといえる。こ

の数値は他の調査研究の諸結果と，また男子の傾向に比較して低率であることに相違が認められない。

そこで，「よかった」と回答した者にその理由を自由記述させた。記述内容を設定カテゴリに沿って分類すると「おしゃれができる」「スカートがはける」といった，いわゆる女性的特性を挙げる比率が各学年とも最も高く，1年生53.8%，2年生42.5%，3年生49.6%であった。こういった女性的特性には精神的・心理的な側面，生理的・身体的な側面，行動的な側面を考えられるが，先の理由は後者の行動的側面に分類される。彼女達は「やさしさ」「思いやり」を主体とする精神的・心理的な特性や，たとえば「子どもが産める」といった生理的・身体的な特性に女性性の力点を主張する以上に，思春期以降に芽生える性的関心に付随する種々の行動に集中しているようである。行動的側面の次に高く挙げているのは，後にも考察するように，女性性ゆえに特別扱いや特別視を受け，そのために得な面が多く存在すると捉えている点である。

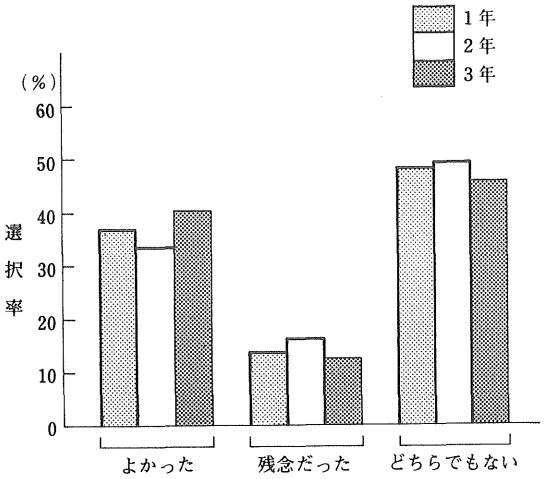

図1　「女子」に生まれたこと

一方，女性性に生まれたことを「残念だった」と否定的に認識している者の割合は，相対的に低く有意とは言えないが，1年生13.9%，2年生16.5%，3年生13.0%で，傾向としては2年生にいくらか高い。自己の性を「残念」と認める理由は何だろうか。有効な記述を分析すると，1年生「礼儀作法・家事手伝いの強要」，2年生「行動に自由がない，男子は活動的」といった男性的特性の肯定と自己の女性役割強要への反発，3年生「女子のさっぱりしない性格」「陰険，しつっこい性格」などの人格特性を強調しており，学年間に意識の違いが認められる。「どちらでもない」という認識がどの学年でも高く，これをどのように理解するかによって解釈も異なる。態度の未確定を積極的に否定していない点に着目するか，あるいは積極的に肯定していない点に着目するかである。ただ，自己の女性性を自信を持って「よかった」と言い切れない彼女達の理由があるものと思われるが，この点は明らかでない。

図2は，もう一度生まれ変わるとしたらとの仮定のもとに，生まれ変わる時の「性選択」の結果をまとめたものである。この種の質問は非現実的な枠を出ないのだが，自己の性の位置づけを知る上で効果的な項目である。図からも明らかな通り「男子」を選択する比率が高く，1年生51.3%，2年生50.0%，3年生43.0%で，「女子」を選択する比率1年生20.9%，2年生20.9%，3年生23.9%を上回っている。異性選択が学年とともに50%台から40%台に減少するのと比較し

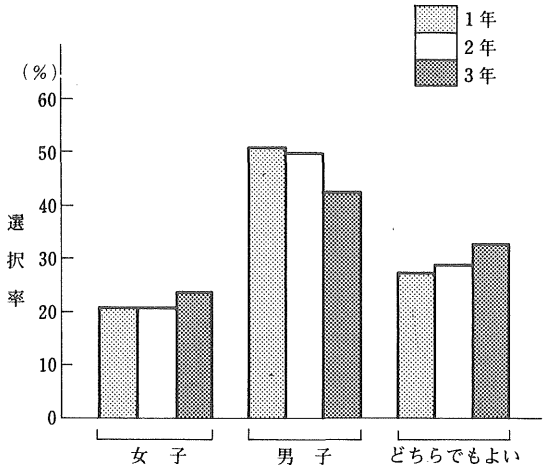

図2　今度，生まれ変わるとしたら

て，同性選択が微少ではあるが増加を示して，女性性を受容する反面「男子になってみたい」とする心理は興味深い。そこで，「男子」と答えた異性選択の理由を内容分析すると，そこから思春期以降の女子心理の一端が浮んでくる。それは女性性の否定から異性選択を求めたというより，どうも「単に今，女子だから男子を体験したい」「違う立場，観点から物を見たい」といった，いわば好奇心からのもので，1年生45.4%，2年生49.6%，3年生45.7%と各学年とも平均して高くなっている。さらに，男子の「さっぱりした性格」や「行動の自由」という特性に憧れを抱いている。今度は男子になってみて男子のことをよく知りたいと思うと同時に，自分や女子全体の「そうでない性格や行動」を男子はどう思っているのかを気にしているとも理解できる。

これに対して「生まれ変わっても女子」と答えた者は，何らかの意味で「今の生活に満足」して「楽しく幸せ」と感じている。意識水準は異なると思われるが，1年生43.1%，2年生38.6%，3年生46.2%の数値の中には，異性への関心や異性との性体験の影響と無縁でない要素も含まれるのではないだろうか。また「どちらの性でもよい」とする者は，比較的冷静な目で「女子でも男子でもそれなりに良いところがあり，それなりに短所もある」としながら，男子にもなってみたいが，今度も女子に生まれたら「今と違った生き方」もできるかもしれないと決め兼ね，以下，性を越えた人間としての条件を述べている。

性受容と性選択との関係はどうであろうか。前述のように性選択に「男子」を想定する者が学年を問わず高率になっていたが，女性性を受容した上での異性選択は1年生38.4%，2年生35.9%，3年生28.7%で先の憧れ心理を物語るものである。また，態度未決定者が男子を性選択の対象にする割合が，1年生49.5%，2年生47.8%，3年生42.5%を占め，未決定者の半数近くは否定的な性受容観を持つ傾向があると見てよいだろう。その起因については後でも触れるが，女子は男子に比べ日常の言葉づかい，礼儀作法など全般的で，しかも伝統的に女子に期待され固定化された行動形態や性役割の面で制約を多く受けていることが考えられる。ただ，女子中学生という発達段階を考慮すれば，このような歴然とした性差意識や性役割観を背景にした水準よりも，これも後で分析が加えられるように，女性性に生きる現状が得であるのか否かの，どちらかと言えば一種の感覚的な水準で捉えていると解釈できないだろうか。現在の性を否定している者が高

率で異性を肯定するのはもちろんの傾向である。

では，女子中学生はどのような状態の時に自分自身を「女子―性」と自覚するのだろうか。有効な回答を分類していくに従って，学年間の特徴が見い出された。全体では女性的特性として許容されるカテゴリに，１年生51.9％，２年生56.3％，３年生59.9％の半数以上が集中する。その中でも，１年生は「生理の時，トイレの時，風呂の時」といった生理的・身体的な側面に21.6％を示し，以下「男子を好きになった時」「泣いた時」といった情緒的な側面や「礼儀作法，家事手伝いをさせられた時」が続いている。２年生は「鏡を見る，髪毛の手入れ，おしゃれなどをする時」といった女性に特有の行動に26.5％，３年生は生理的・身体的な側面に23.9％，女性的行動に21.3％の比率を示し，いずれも何を基準に性判断をするのかを理解する上で価値の高い内容と思われる。

Ⅲ　親からの性役割期待と行動制限

人間は誕生から現在まで，その時々において実にさまざまな地位を占めている。女子中学生も例外でなく，家庭にあっては子ども，特に女の子としての行動や態度を求められることが多い。そこでの彼女達に割り当てられた役割には，女性性のために親から期待されるもの，そして女性性のために親から制限や禁止を受けるものが顕著である。親の役割期待に沿う時，それは女子として好ましい行動や態度とされ，反対に役割期待に合致しない，あるいは対立する場合には女子らしくないという評価が形成され定着してくる。彼女達は親や世間一般からどのように見られていると自認しているのだろうか。また，女子として特に親から教育や躾の面で特別扱いを受けた経験はあるのだろうか。

図３は，女子という性のために親から特別にさせられたことがあるかについて，その傾向比率を示したものである。図中の「たくさんある」と「少しある」を加えると，１年生54.2％，２年生53.5％，３年生58.8％で，各学年とも半数以上の者が親から何らかの要請を受けている。学年平均では55.5％の者が経験を持ち，その記述内容を平均して分析してみると，「女子だから」という理由で「家事手伝い」を特別にさせら

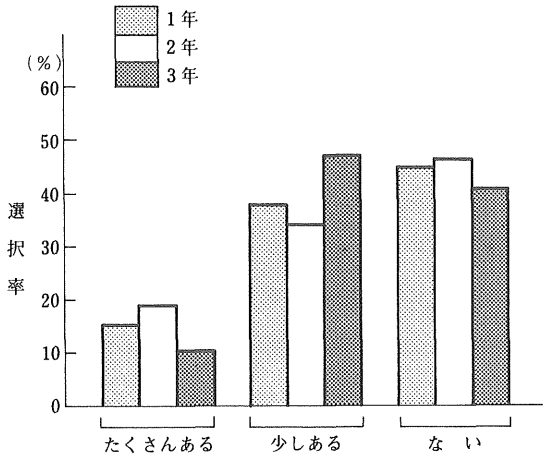

図３　「女子だから」といって親から特別にさせられたこと

れたと答えた者が49.0%と圧倒的に多い。続いて「礼儀作法の強要」や「言葉づかい・態度の注意」の20.6%で，それ以外の分類項目には大差が見られない。ただ「お稽古ごと」は3年生に多く，また「夜の外出禁止」や「帰宅時間の制限」頻度も3年生に多い。親自身の役割期待と同時に，親に普遍的な心理的不安が交錯しているのだろう。そのためか，興味深い点は「女子」なるが故に親からいろいろとかばってもらう経験もあるらしく，これは学年の低い者ほど多かった。学年による親心理の視点の相違が存在するのかもしれない。

一方，**図4**は女子という性のために親からさせてもらえなかったことについての結果である。上記と同様に，図中の「たくさんある」と「少しある」の合計は，1年生33.5%，2年生37.4%，3年生39.6%と，わずかではあるが学年進行とともに増加傾向を示している。親からさせてもらえなかった以上に，させられたことが多いと彼女達が指摘している点に注目したいと思う。さて，女子ゆえに受ける行動制限の種類を設定カテゴリにおいて分析すると，平均して最も比率の高い項目は「夜の外出制限」の28.2%で，続いて「日常行動の制限」の22.4%，「自由な礼儀作法・態度の制限」の13.7%，「遊びの制限」の11.8%，「男子的行動の禁止」の10.6%，「スポーツの制限」の9.8%などの順であった。学年が進むにつれて外出や行動の制限が増え，礼儀作法や態度への容認が減少している。

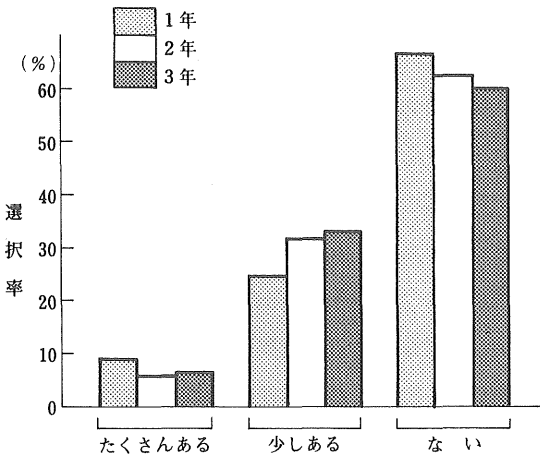

図4　「女子だから」といって親からさせてもらえなかったこと

Ⅳ　女性役割の評価

前述の設問に対する女子中学生の認識の中で，自己の女性性をどちらかと言えば否定的な意図を持って捉えている状況を見てきた。その際に，彼女達の性役割意識の機序が，いわゆる伝統的な性役割観の上に形成されたと見るより，思春期特有の感覚的で，自己の日常生活を営むのに有利な展開となるか否かの観点によると指摘した。従って，それは「得—損」の水準で性役割を評価していると言えるだろう。

図5は，女子として得をしているかの回答比率をまとめたものである。図中の「たくさんある」と「少しある」を加えた割合は，1年生の46.5%において女子として種々の面で得をしてい

ると考える者が最も多く，２年生38.3％で下がり，３年生43.0％で再び上昇することが明らかになった。有意とは言えないが「女子だから得」という意識は，２年生において他の学年に比較すると肯定する割合が低いようである。そこで，「得である」と考える場合に彼女達は何を指しているのかを自由記述させた。各学年ともに比率の高かった内容は「男子との比較の上で特別扱いされる」ことで，１年生55.2％，２年生40.3％，３年生63.6％になり，３年生に最も高く２年生に低い。また，誰からその扱いを受けるかについての順位を調べると，１年生では「教師」「一般のおとな」の順，２年生，３年生では「一般のおとな」「親」の順であったが，特に３年生は「一般のおとな」から優先的に特別扱いを受けていると認める者が58.9％の高率であり，反対に「教師」から受けるとする者はわずか3.6％であった。他の男子から受ける割合は２年生の13.8％を筆頭に各学年とも大差ない。次に多かったのは，いわゆる「女子らしさ」の特性の指摘で，２年生の30.6％が，１年生16.7％，３年生15.9％を大きく上回っていて，２年生の心理的変化の一端がうかがえると思う。３年生になるに従い，親を含めたおとなに，男子に対して優先的に特別扱いを受けることで，自己の性役割を得と判断するようである。ただし教師に関してはそうでないらしいので，その点を強調しておきたい。

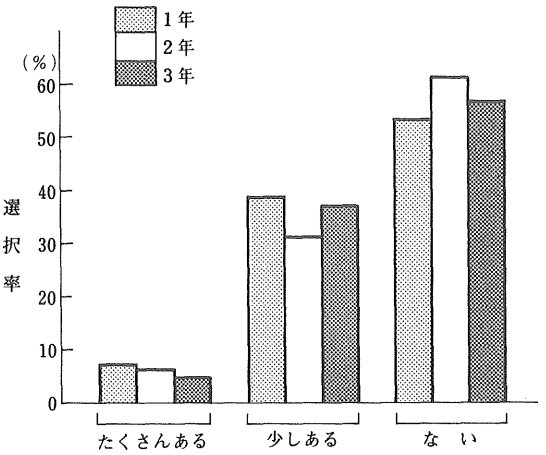

図５　「女子だから」といって得をしていること

次に，自己の女性性に関わる性役割や求められる性役割期待を損と考えるかの集計結果を**図６**に示した。同様に「たくさんある」と「少しある」に評定した比率を合計すると，１年生52.6％，２年生50.4％，３年生49.6％で，学年間に有意な差は認められないが，徐々の減少傾向は見られる。なお，上記の性役割に得があるとした者で同時に損もあると答えた者は，１年生66.4％，２年生72.7％，３年生63.4％で，彼女達は得―損の両極性の存在を強く感じているだけでなく，質問の１つひとつに敏感に反応する姿が浮んでくる。２年生にそれが高いのは特徴的である。そこで，有効な自由記述の中から損と意識する点をまとめた。１年生では行儀，姿勢，言葉づかいといった「礼儀作法の強要」に25.4％，「家事手伝いの強要」に14.9％を示し，２年生では外出や遊びなどに対する「行動への干渉」に25.0％，「礼儀作法の強要」に21.9％，３年生では「行動への干渉」に29.9％，「礼儀作法の強要」に19.6％などの順になっていて，学年とともに「礼儀作法や家事手伝い」を否定的に認める傾向が高率ではあるが徐々に減少し，反対に「行動への干渉」をうるさく思う思春期特有の傾向が上昇している。その他目立った特徴として，１年生は野

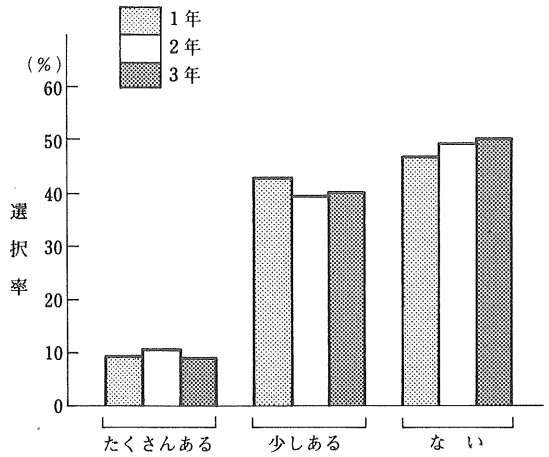

図6　「女子だから」といって損をしていること

球，サッカーなど「特定の運動ができない」に14.0%，2年生は生理現象，トイレ，妊娠など「生理的なハンデ」に13.5%，3年生は職業，地位など「女性の社会的存在の低さ」に15.9%を，他の学年に比較して損であると理解する。3年生は進路選択の時期にも当たり，女性の社会的地位の低さを現実社会の中で発見し始めているのだろうか。こういった不満は，たとえば「ダメな男子は女のくさった奴と言われるが，女子はダメな男子と同列なのか」という悲痛な訴えにも見られ，これからは男子のとる女子の位置づけを今一度熟考しなければならないだろう。

V　男子志向への葛藤

最後に，ここでは女性役割の評価という観点から，男性役割や役割期待に対する女子中学生の見方へその視点を移してみよう。具体的には「男子はいいな」あるいは「男子でなくてよかった」と思う複雑な心理過程を捉えようとする。

図7からも明らかなように，「男子はいいな」と思うことがあると答えた者は，1年生62.6%，2年生51.7%，3年生61.3%と変化し，2年生で低くなっているのに対し，「どちらでもない」とする比率は高くなっている。これらの男子志向と「生まれ変わる時の性選択」との関わりを調べると，「男子はいいな」と思い「生まれ変わるとしたら男子」と回答した比率は，1年生70.3%，2年生68.9%，3年生75.3%で，3年生は異性選択率こそ他の学年に比較してやや低いが，両者の一貫性は高いようである。

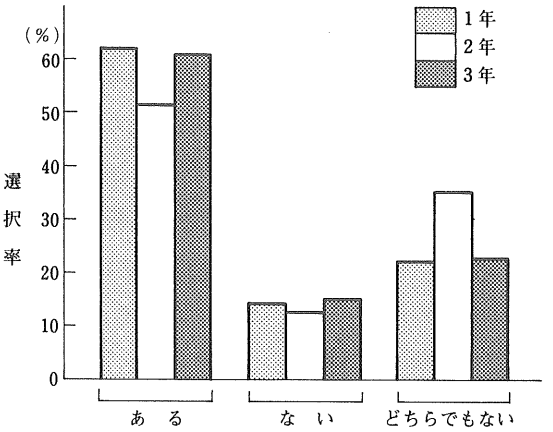

図7　「男子はいいな」と思うこと

自由記述の内容を分析してみると，「男子のよさ」について1年生は「性格」に24.5%，「行動の自由」に19.6%，「運動能力」に16.8%，2年生は「行動の自

由」に28.1%，「性格」に19.3%，「友達関係」に14.9%，3年生は「性格」に27.9%，「友達関係」に18.6%，「行動の自由」に18.6%などを挙げている。女子中学生は，男子に容認された「行動の自由」をうらやみながら，男子の「さっぱりした性格」と「オープンな友達関係」に好感や憧れを持ち，同時に女子の「うじうじした性格」を嫌うと自認している。ある女子は次のような感想を述べている。「休み時間に遊ぶ時など，男子は外に出てバスケットなどをやって汗をかいたりしてすごく楽しそうなのに，女子はいくら誘っても外で遊ばず，暗く部屋で話したりしているとき，男子はいいなあと思う」と。まさに『男子は夕立，女子は霧雨』なのかもしれない。

他方，「男子でなくてよかった」と思う傾向は，**図8**のように1年生34.4%，2年生30.0%，3年生37.4%を示し，いずれもそれを否定する比率を上回っている。その理由を分析すると，学年が進むにつれて，男子は「戦争に行かねばならない」「責任が重い」「妻子を養う」「一生働く」といった，いわゆる男子に要請された社会的責務—役割期待と受け取れる事柄に対して，自分が女子であるが故に免れる利点を認めている。この傾向は1年生24.4%，2年生43.4%，3年生61.5%と学年とともに急上昇を示すのである。

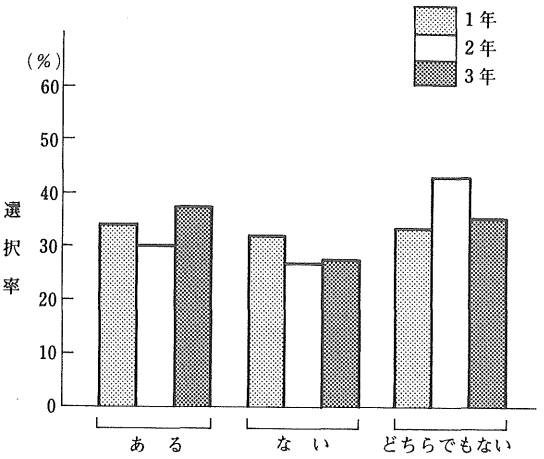

図8　「男子でなくてよかった」と思うこと

Ⅵ　結　語

本研究は，幅広い観点から女子青年の性差意識を調査し，その現象的な意識内容を明らかにしようと試みたものである。従来の，特に性役割研究では，厳密な統計的手法を用いて性役割スケールを開発し，それによる性役割観や性役割行動の心理学的意味が測定・評価されてきた。本研究もその過程の一環として，自己の「性」に対する認識，特に判断の前提になる自己意識の根拠を把握したいと考えたのである。

調査結果を概観すると，ここでの対象である女子中学生の分析内容から，いろいろな意味でどうも中学2年生が転換期を形成しているらしいことが見い出されたのである。発達的にスムーズな進行を示さないようである。女子が同性よりも異性をポジティヴに評価するようになる転換期が中学2年生との報告が多い中で，質問方法によってはこの時期以降に女子の卑小感が増大する傾向も見られる。その理由として，たとえば女子は将来への展望が持てなくなるとか，対外的に

自己表現欲求の増大につながるころなどの解釈が可能かもしれない。自己の女性性を得と感じる反面，それを損とも感じることが多く，実に流動的である。異性への憧れは，単に性的関心や性的興奮から発展した性衝動の対象でしかないのだろうか。

調査の範囲から理解できるのは，たとえば「女子に多く期待されている社会的しきたり」に反発し，同時にそれが男子には許されていることへの不満，さらに男子には比較的容認される「行動の自由」，「男子は夕立，女子は霧雨」に代表される男子特有のさっぱりした性格，男子の「オープンな友達関係」などに対して，女子自身がすでに役割期待を固定化させ，憧れという形で距離感を保とうとしていると思われる。しかし，このように自己の女性役割を積極的に肯定しないことが彼女達の性役割観かと言えば，必ずしもそうではない。たとえば「戦争」「仕事」「責任」といった本来は平等であるはずの社会的責務が，男性主導で行なわれている現状を一面で受け入れて，自分が女子であるために免れる利点を，ここぞという時にはっきりと述べており，まさしく彼女達のアンビバレントな感情が表出していると言えるのである。

今後は，多様な回答の中から相互の関連性をさらに検討し，種々の発達段階にある青少年の性差意識や性役割観の一層深い心理学的意味を追究していきたいと考えている。

参考文献

天野隆雄：「女子生徒の心理とその教育」，早稲田大学出版部，1975.

東　清和・小倉千加子：「性差の発達心理」，大日本図書，1982.

福富　護：「性の発達心理学」，福村出版，1983.

間宮　武「性差心理学」，金子書房，1979.

東京都幼稚園・小・中・高等学校性教育研究会連絡協議会(編)：「現代っ子の性」，教育開発研究所，1984.

津留　宏(編)：「性差心理学」，朝倉書店，1970.

依田　新他(編)：「現代青年の性意識」，現代青年心理学講座，5，金子書房，1973.